ニューズレター
2010 年 7 月 13 日

校長ニューズレター（第 16 号・7 月号） 宜野湾市立長田小学校校長：横山芳春

五月雨を集めて早し最上川

ご存じ松尾芭蕉の俳句です。この句は、6 年生の教科書にのっていて、こどもたちは国語の時間に勉強します。

この俳句を教材に、共同研究者の西江重勝先生をむかえて、6 年生の全教室で協働授業をおこないました。協働授業とは、担任の先生と応援の先生（西江先生）がいっしょに授業をつくっていく授業です。基本的には、担任が授業を進め、授業が停滞したり（子どもたちの表情が暗くなるのでわかります）、担任が行き詰まったりしたとき、応援の西江先生が助け船を出すという形の授業です。

そうそう、担任が授業に行き詰まったりすることは、けっして悪いことではありません。授業がスムーズに流れていき、ナンのよどみもないような授業はかえって浅い授業になりがちなのです。行き詰まりの場面などは、先生も思考中である場合が多いのです。

たとえば、子どもの考えが、予測していたものをはるかに超えてすばらしかったときなど、先生の反応はおおむね二つに分かれるのです。

①無視して先生が準備していた流れで授業を進める。

②先生がたちどまって考えてみる。この場合、子どもたちといっしょに考えることで、授業の質がたかまっていく可能性があります。

どちらがいいのか？　②だと思います。一般的には、先生が立ち往生しているとしてあまり評価されないのですが、わたしはそうは思いません。先生だって分からないことがあります。子どもたちと、学びあう先生は成長します（子ども成長します）。

さて、この俳句の授業では、まずわからない言葉を明らかにしていきます。

五月雨は、「陰暦 5 月頃に降る長雨。梅雨。」

早しは、「早い」と「し」に分けて調べる。「早い」は、時間が前、または先であること。「し」は、意味を強めること。川の流れがはやいという漢字は、通常「速い」であらわす。しかし、小学館「日本語大辞典」で、「早い」もスピードが大である、とでている。

つぎに、疑問点を明らかにしていく。

疑問１：雨はいま降っているのかいないのか？

疑問２：作者はどこでこの句をつくったのか？

このような発問で、子どもたちの考えをゆさぶって、俳句のイメージをふくらませていく。

さいごの発問は、「芭蕉はどんな気持ちでこの俳句を詠んだか？」。

時間もほとんど無くなってきた。この時間帯になって、わたしの頭の中にムクムクとある考えが浮かんできた。わたしも授業にどっぷり参加していたのです。

芭蕉はどのような気持ちであったか？

私の解釈は、「長雨が集まってきて、流れが速く最上川を渡れるかどうかわからない。旅を続けたいので早く渡りたい、だけど流れが速くて、怖いなあ・・・」である。

そこで駄句ひとつ、「台風の雨かぜ強し那覇空港」。わたしの一昨年のベトナム旅行。台風が来た沖縄。香港から那覇に飛行機（わたしが搭乗する飛行機）が飛んでこない。数時間、空港で待機になる。今日はダメということで、自宅に帰る。深夜、航空会社に電話。香港から早朝、飛行機が来るとのこと（香港エキスプレス航空）。朝の出発になる。だけどまだ風が強い。飛びたいけどとても怖い。芭蕉の意識もこんなところであったのでは・・・

（余談）香港エキスプレス航空は、那覇の客を迎えに空便 2 機を香港から深夜とばしてくれた。それでやっと香港経由でホーチミンに行くことができた。アッパレ！

しかし香港では空港で１２時間ほど乗り継ぎに時間待ち。映画「ターミナル（主演：トム・ハンクス）」状態だった。芭蕉の時代も現在も、旅とは「待つこと」なのかもしれない。